

1 エンパシーに根ざしたケアリング

p. 10

1. ケアの倫理

ギリガンの『もう一つの声』では、「ケア・ケアリングの倫理」が有する特有の考え方について言及されることは少ない。これに対し、ノディングスの『ケアリング』では、ケアの倫理がもつ特徴やそれが何にコミットしているのかということが詳細に説明される。ノディングスこそ、ケアの倫理を詳しく説明しようとした最初の人物であった。それゆえ私はここで、彼女の見解について概観しておく。

ノディングスによれば、ケア倫理とは、「個人がケアリング的に行為する」ことを求め、それを推奨する。そしてこのことは事実上、「我々は正しく・許容される仕方で行うのは、我々の行為が、他の人たちに対するケアリングという態度/動機を表出・示している場合である」ということを意味している。ある行為が道徳的に許容され、善いものでさえあるのは、その行為が〈行為者側のケアリング〉を示す場合なのであり、頭を掻くといった普通の場合にケアリングは関係ない。他方で、他の人たちに対する無関心や悪意を示す行為は、倫理的に不正・悪と見なされる。ここで重要なのは、ケアリングの態度、すなわち他の人たちへの関心(concern)が、そのような他の人たちと関連しているその仕方である。

ノディングスによれば、真なるケアリングの行為には、特定の他の人々に対する情動的で動機づけの力を持つ感受性が含まれている。ある人 A は、別の人 B が存する状況に関心をもっており、A の焦点は、抽象的で一般的な道徳の諸原理よりも、その個人そのものに合わせられている。

p. 11

つまり、A が気にかけているのは、B の福利(welfare)に他ならないのであり、その他の人たちの福利は背景に退いているのだ。その意味でケアの倫理は、公然と不公平なものとなるだろう。

ノディングスによると、われわれがケアリングの態度を取ることができるのは、自分たちが知っている人々に対してなのであって、おそらくは会うこともないような人々に対しては無理であるという。しかしヴァージニア・ヘルドと私は、このような仕方でのケアリングの捉え方(notion)を制限する十分な理由がないと論じてきた。もちろん、〈人道的ケアリング〉と〈個人的ケアリング〉との間には強さの点で違いはある。しかし両方のケアリン

グは、ケアリングと自然に呼ばれるのであり、近年の著作ではノディングスもこの点を認めている。以上のことは、帰結主義と比べてケアリングの倫理・道徳性が不公平なものであることを意味している。それはまた、不完全でもある。もしわれわれが、個人的に自分たちの知らない人たちとケアリングの関係を結ぶことができないのなら、その人たちと我々との道徳的な関係は、ケアリングの倫理によっては扱われず、むしろ正義についての別個の考慮によって扱われるものとなる。しかしながら、見知らぬ人や遠方の他人にとる態度も、(ある種の)ケアリングとなりうることを認めるのであれば、ケアの倫理の枠内でそのような人々との関係を取り扱う地平が切り拓かれるのである。

ノディングスはまた、〈ケアリングの良好な関係〉には〈互酬性〉が見られる点を強調する。[もちろん、]母親と赤子の間のケアリング関係は、平等で相互的なケアリングの関係ではない。しかし、赤子でさえ、母親の愛情溢れる配慮に応答する術を身につけている。微笑んだり、甘い声をだしたり、お乳を欲したり。そのような赤子の反応がケア授与者＝母親を喜ばせていることは明らかであるが、ノディングスは、ケアリングが、ケアされる側におけるケアリングのある種の応答・受容でもって完全なものになる必要があると考えている。加えて彼女は、われわれが、そのようなケアリングの範囲を、見知らぬ人たちを含むように拡張するようにすべきだと考えている。

p. 12

かくして、全体としてケア倫理は、個人の福利だけでなく、良好な関係に対しても払われる〈関心〉によって、特徴づけられてきた。しかし本書では主として、前者を集中的に論じる。私は次のことを前提とする。すなわち、明らかに(specifically)道徳的である態度や責務とは、〈他の個人や集団を助けたいと思う欲求〉を基軸にしている。そして後で私は、次のことを示そうと思う。すなわち、(特定の)関係を作りそれを維持しようとするわれわれの関心には、一つの倫理的な理想(ethical ideals)が含まれており、これによってわれわれは、利己主義と利他主義の間に通常見られる区別を越えるのであり、それゆえにこの理想は、厳密に・明らかに(strictly or specifically)道徳的なものを超越するのである。この点については、第七章にて一層十分に扱う。

ノディングス曰く、ケアリングというもののうちには、〈通常の自己利益〉を、〈他人に対する非自己中心的な(unselfish)関心〉へ置き換えることが含意されている。つまり他人にケアをする人は、特定の個人に焦点を当てるだけでなく、その他の人に専心している。そのことは、誰か他の人について心の底から真剣にケアする人は、他の人間の現実に対して

心を開いており受容的なのである。そのような人は、一般に善であるものについて自分たちの考えを押し付けることはなく、むしろ、他人が世界を構築する仕方や他人と世界との関係性に注意を払い、それに没頭するのである。

ノディングスは苦心して、「専心(engrossment)」と「エンパシー」とを区別している。ノディングスによれば、エンパシーは専心よりも、受容的(receptive)というよりもむしろ、一層能動的な態度を意味する。彼女は〈エンパシーを働かせている個人(empathic individual)〉を、他人の立場に立つものとする。そしてそのように(想定上自発的に)他人の身になることは、明らかに男性的なやり方/考え方を構成しており、それは「専心」として描かれる〈受動的、少なくとも受容的で女性的な態度〉とは対照的である。しかしこうしたノディングスの用法は、エンパシーに関する近年の心理学の文献の実態を把握していないものである。彼女がエンパシーと呼んでいるものは、実際にはエンパシーのただの一種に過ぎず、それは投影的エンパシー(projective empathy)と呼ばれるものである。しかし、マーティン・ホフマンの指摘によれば、エンパシーには他の諸形態がある。そのうちの一つを彼は、「介在連合的エンパシー(mediated associative empathy)」と呼ぶ。

われわれは「専心」ではなく、「エンパシー」という語を用いればよいわけだが、一層重要なのは、エンパシー/専心が、ノディングスらが理解していたよりも一層決定的な役割をケアの倫理において担うということである。ケアリングの倫理は、以前よりもエンパシーに関する心理学的文献に注意を払う必要がある。その理由を以下で説明する。

p. 13

2. エンパシーの本性

心理学の文献を紹介する前に、「エンパシー」という後の意味について予備的考察を行っておく。そもそも、その語自体 20 世紀初頭まで英語にはなく、ドイツ語の *Einfuehlung* の訳語として採用されたものである。だからといってエンパシー概念/観念が我々の文化に見られなかったかというところでもない。ヒュームは『人間本性論』の中で、いまエンパシーと呼ばれているものについて、重要な草分け的事柄を述べている。とはいえヒュームがそれを指し示すのに、「共感(sympathy)」という語を用いたのだが。それでは「エンパシー」と「共感」の違いは何かと言うとそれは、〈ある人の苦痛を感じること(feeling)〉と、〈苦しんでいる人のために同情すること(feeling for)〉との間の違いである。エンパシーとは、我々が苦しんでいる他人を見たときのように、自分のうちに他人の情感が生じることを意味している。それはまるで、他人の苦痛が我々のうちに侵入してくるかのようなものであり、

〈ある人が感じているもの〉と〈他の人が感じるようになるもの〉との間で起こる感染 (contagion) である。しかしわれわれはまた、苦しんでいる人のためを思って悲しみを感じることもあるのであり、その人によくなって欲しいと積極的に願うものである。これが彼らに対する共感であり、それはわれわれがその苦痛を感じていなくても生じうるのである。

以下で簡単に、エンパシーについて考察している近年の心理学の文献を二つ取り上げよう。一つ目は C・D・バットソンの *The Altruism Question* であり、二つ目はマーティン・ホフマンの *Empathy and Moral Development* である。

バットソンは、「エンパシー利他主義説」を展開し、その説においては、苦境にある人に対して同情し (feel toward)、利他的に行為するかどうかを決定する際に、エンパシーが重大なファクターとなるとされる。

p. 14

そしてこの説を支持するよう見える一つの事柄として、次のものが挙げられる。すなわち、他の人が苦悩している場面に出くわしたとき、人々がエンパシー的な苦悩を感じる場合、彼らは極めて頻繁にその他人を苦悩から解放しようとする行為するのであって、その場を離れて、そのために自分たちにとっての苦悩の源泉から離れようとはしない。後者を行なうことは明らかに、自己中心的・利己的な動機づけを示しているであろう。しかしバットソンは (ホフマン以上に)、その場面を離れるのではなく、元々苦悩している人のために行為することもまた、微妙に利己的な観点から説明できるかもしれないと考えている。その後バットソンは、利他主義の可能性を様々な文献から得られる知見を用いて説明しつつ、自身の「エンパシー利他主義説」が妥当なものであることを示す。とはいえ、エンパシーが実際にどのように発達し、ケアリングする我々の能力にどのような影響を及ぼすのかについて明確に説明しているのはホフマンの書であり、こちらを一層参考にすべきである。

ホフマンによると、個人のエンパシーは複数のステージを経ながら発達する。そしてエンパシーが「向社会的 (prosocial)」、利他的、道徳的な動機づけと結びつくことは、その発達の初期段階においては不明瞭で秩序だっていないという。赤子が、他の赤子の泣き声を聞いて突然泣き出すなどは、ある種の模倣ないし感染の働きに見える。しかし、子どもが概念的/言語的スキルを発達させ、自他両方についての経験を積むにつれ、一層「介在的な (mediated)」形態のエンパシーが、直に目の前に現れておらず、単に聞かれ、思い出され、読まれただけの状況や経験に反応して (不随意的に) 生じることになるのである。子どもが他者の観点を採用し、他者の観点から物事を見たり感じたりすることもまた可能になるの

である。これら、次第に発達する型のエンパシーは両方とも、他人との一体化(identification)を意味しているものとして語られることがあるが、ホフマンらはその一体化が、他人と同化することでも他人に溶けいっていきことでもないと主張する。真正の成熟したエンパシーは、エンパシーする個人(empathic individual)から、〈[自分が]エンパシー対象の人物とは異なる人物であるという感覚〉を奪わないのである。

p. 15

個人の認知的洗練がなされ一般的な経験が増えれば増えるほど、その個人は、ますます見事で洗練されたエンパシーの「技(feats)」を使うことが可能になる。例えば、行為や出来事の未来の・仮言的な結果に気がつくようになればなるほど、われわれはある人が実際に感じているものだけでなく、将来・仮想的に感じるようになるものを感じるのである。

最後にホフマンは、道徳的な動機づけや行動が十分に発達するためには、「誘導的訓練」、あるいは単に「誘導」と呼ばれるような両親や他の人たちによる介入が必要だと考える。高圧的に子どもを調教するのとは異なり、誘導的訓練は、他者とエンパシーする子どもの能力に依存している。つまり、ある子どもが他の子どもたちを傷つけているときに〈誰かが気がついていること〉を必要とし、そして誰かがその子に、自分がしでかした害に鮮明に気づかせることを必要とするのである。これによって子どもは、自分がしでかしたことについて不愉快に思うよう導かれる。そのような訓練が継続して長期にわたりなされるのなら、子どもが不快な情感(罪の意識)を、自分がしでかす可能性のある害が未だになされていないような状況に結びつけるようになる、そうホフマンは信じているのだ。彼はそのような習慣による連想を「スクリプト(script)」と呼び、それが道徳原理や規則を下支えし、それらに動力を与えるものとする。

以下では、バットソンとホフマンが、エンパシーこそ、利他的な他者への関心の重大な源泉でありそれを支えるものであると論じていることを前提することにしよう。エンパシーの強さや力が異なることによって、様々な状況における他者の運命に対する我々の気遣いに、違いが生み出されることになる。そしてこれこそまさに、経験的な社会科学的調査がなかったにも関わらず、ヒュームの慧眼によって理解されえたことなのである。とはいえ、もう少し詳しく、これらの知見が道徳の諸問題に関わるようになるのかについて見ておく必要がある。

p. 16

私は、エンパシーと他者に対するエンパシー的なケアリングの捉え方が、われわれに道

徳的評価の妥当な基準を与えてくれると信じている。普通に・十分に発達した人間のエンパシー(の強さ)が様々であることは、直観的な道徳的評価が様々であることと極めてよく一致するのである。そしてそのことによって、エンパシーを組み入れるケアリングの倫理が、公共的/政治的な道徳性と私的/個人的な道徳性の両方について、極めて一般的な説明を与えるものになるのである。ではまず、こうしたテーマについて描くために、エンパシーからスタートするような事例を取り上げよう。それによって、私は単なるケアリングを越えて、エンパシクなケアリングの考えに至らねばならないと感じるようになるのである。その事例として、危険なほど論争を呼ぶもの、つまり、中絶の道徳性の問題を取り上げる。そう言うものの、エンパシーの考えを、道徳の問題に適用することは、中絶の事例によって、申し分なくシンプルな形で描き出されるのである。

3. エンパシーと中絶の道徳性

中絶の道徳性を巡る多くの議論では、「女性に中絶する権利があるかどうか」および「胎児、胚、受精卵とは権利を持つ人間・人格であるのかどうか」に焦点が当てられる。しかし近年、その問題には徳倫理学の観点から、アプローチが試みられている。ハーストハウスは、「胎児に権利があるか、および女性に権利があるか」という問題は、中絶を取り巻く道徳的問題にとって二次的なものと考えられる。ハーストハウスによれば、中絶が行なわれる場合には何か価値あるものが失われるのであり、たとえ女性に中絶する権利があるとしても、「特定の中絶行為は道徳的に正しいものになるかどうか」という問題が解決されたとしても彼女が考えているわけではないと思われる。というのも、〈女性の中絶する権利〉とは、〈他者、とりわけ国家が、女性の中絶遂行を妨げるために、許容される形で行なってよいこと/行なってはならないことに関する問題〉であるが、ハーストハウスによると、国家に干渉が認められないとしても、中絶を行なう女性本人や医者は、その行為が悪徳な・悪い動機を体現している・示しているという理由で、不正に行為しているかもしれないのである。

p. 17

この徳倫理的な観点から理解するのであれば、中絶を決定することの正しさ・不正さは、独立した形で存在している人間の/政治的な権利や道徳規則に一致するという事態なのではなく、そのような決定の背後に存する性格や動機づけに由来するものなのである。私は、ケアの倫理が、中絶を取り巻く道徳的な問題は、そもそも権利に依存するのではなく、その裏に潜む動機づけや性格に依存するものであるとする点で極めて自然にハーストハウ

スに合意すると考える。しかし、ハーストハウスは新アリストテレス主義的な徳倫理学であり、彼女のアプローチはエンパシーに関する区別に全く訴えないものである。しかしながらケアリングの倫理が、ヒューム流の道德感情論の伝統に与するのは明らかである。そこで私はここで、ケアリングの倫理が、中絶の問題を取り扱うに際し、なぜエンパシーに訴えようとするのか、その理由を明らかにしたいと思う。

ケア倫理学者は中絶の道德性を論じるにあたり、エンパシーについてあまり語らない。とはいえ、その二つを結びつける唯一の論者にジョン・ヌーナン(カソリックの学者)がいる。彼は、胎児にエンパシーするという考えが、中絶の道德性に、特に胎児の権利に関係するとする。

彼によると、「我がことのような経験(vicarious experience)」という捉え方は、胎児の経験について考察するよう求められるとき、ギリギリの限界に達しているように見えるという。誰も生まれるときのことを覚えていない、それは誰も死にそうなときのことを知らないのと同じである。しかしながら、エンパシーが記憶の代わりに務めるのである。胎児の経験は、赤子の経験や死にかけているときの経験と同じで、我々の知識を越えてはいないのだ。実質的にヌーナンは、我々が胎児にエンパシーする/共感することができると論じている。

しかしながら、彼の論考について考え始めたときに即座に念頭に浮かんだのは、エンパシーの考えが中絶の文脈内に諸刃の剣を持ち込んでいるということである。なるほど、胎児の経験が、新生児のそれと同じで我々の知識を越えてはいないのなら、そしてそれら両方に我々が等しくエンパシーを感じるのであるなら、胎児と新生児を同じものとして扱うべきと感ずることだろう。しかし、それらの経験は実際に、我々に等しくアクセス可能なのだろうか？本当にわれわれは、新生児と同じくらい胎児にもエンパシーを感じる・感じることができるのか？私には、「感じないし・感じるできない」と思える。そしてその場合、エンパシーを中絶の議論に持ち込むことは、[ヌーナンの意図に反し]むしろ女性の「選ぶ権利」を支持することになる。

p. 18

ヌーナンは胎児の擁護者の主要な仕事は胎児を可視化することだと論じる。しかし、写真や映像などによってたとえ我々にそれが可能であるとしても、このことがエンパシーの問題と一義的な仕方に関係をもつかどうかは明らかでない。最初期段階の胎児は、魚や山椒魚に似ていて、それらには経験、脳、四肢すら欠けている。こうしたことによって胚や初期段階の胎児は、われわれとは異質なものに見え、だからこそわれわれが、初期段階よ

りも後期段階の胎児に一層エンパシーを感じてしまうのは自然なのである。

この点を、ヌーナンは全く考えていない。それゆえこの点を考慮すると、エンパシーを採用するケアリングの道徳性には、初期段階の胎児を中絶する方が後期段階でするよりも、道徳的により善い・より悪くないと主張する理由が与えられることになる。従ってヌーナンには失礼ながら、このようにエンパシーに訴えることは、中絶の悪さを示すどころか、選択の権利を擁護する多くの論者に好意的に見える結論を引き出させてしまうのである。しかし、後期段階の胎児の方が、初期段階よりエンパシーしやすいのであれば、同じ区別を、赤子と(後期段階の)胎児の間ですることができるのか？

おそらくその区別はできないように思えるだろう。結局、後期段階の胎児は生存可能であり、間もなく生まれるわけであり、場合によってはすでに生まれた赤子よりも発達していることもある。それゆえ、新生児と、比較的成熟した後期段階の胎児とに、われわれは容易に、等しいエンパシーを感じるはずではないのか？私にはよく分からない。

第一に、たとえ胎児がエコーなどによって可視化されるとしても、それはせいぜい間接的なものでしかない。第二章で詳しく論じるが、そのようにして胎児に接することは、新生児に接するときのものよりも、直接性という点で劣る。新生児はまた、泣きもする。おそらくは、それによってわれわれは自分自身の脆弱さを思い出すので、泣くことはわれわれの心の琴線に触れ、エンパシー的な反応を引き起こすのである。

p. 19

その場合、新生児を殺すことは胎児を中絶することよりも、普通の人間のエンパシーの流れ・傾向に強烈に反するのであり、それが新生児殺しの一層の悪さを、それを道徳的に受け容れることができないことを、示しているのである。しかしもちろん、以上のいずれも、胎児や胚を中絶することが道徳的に全く正しいとか許容可能であるということを示してはいない。とはいえ、ここまでの議論で、次のことが確認されたと思われる。すなわち、直観的により善い・より受容可能なものと、直観的により悪く・より受容不可能なものに関する道徳的問題を明確にするために、エンパシーの違いをどれほど使えるのかということは確認された。そこでこれから、こうしたやり方を、他者を助ける道徳的責務の問題に応用しようと思う。

最後に、エンパシーに訴える方法論が、動物、考えや理想、あるいは植物、環境、生物圏についても当てはまるかもしれないが、以下では、ケアやエンパシーの対象を、人間ないし人間集団に限定して考察する。